愁ひ顔のさむらひたち

河上徹太郎

文藝春秋

愁ひ顔のさむらひたち

昭和五十年三月十日　第一刷発行

著者　河上徹太郎
発行者　阿部亥太郎
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話二六五一一二一一
郵便番号一〇二　振替東京六七四三

印刷　精興社
製本　大口製本
製函

万一落丁乱丁がありましたらおとりかえします

© Tetsutaro Kawakami 1975
Printed in Japan

目

次

I

医と詩の亡命僧　9
僧月性のこと　25
吉田松陰と富永有隣　34
攘夷のハムレット—赤根武人—　56
敗軍の将己れを語らず　87
大島のもののふども—世良修蔵—　94
悲願の殿様・吉川経幹　124
幻の故里　152

II

わが不老長寿　161

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マスコミの暴力 166
川端康成コントラ横光利一 176
世紀末人・吉田健一 186
三代の交遊 192
墓碑と弔辞 200
ロアール紀行 211
ロアール河から宮島へ 221
わがトラ箱記 232
一警官の手紙 237
犬は繋ぐべからず 242
カル鴨二題 247
あとがき

装幀　坂田政則

愁ひ顔のさむらひたち

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

医と詩の亡命僧

郷里岩国に滞在してゐると、友人が時々訪ねて来てくれるのが愉しい。古い家が若返るといつたところだ。然し近年は同年輩の友人が減つて年下のお客が多くなつたのも私の歳といふものであらう。この夏は安岡章太郎・阿部昭の二作家と、「新潮」の坂本君、「文藝」の寺田君の四人がはるばるやつて来た。

われわれは宮島でビールと名物のあなご弁当を積んでヨットに乗つた。先づ大鳥居へ向つたが、この鳥居をヨットでくぐるには、潮が多ければマストがつかへ、少なければ底がつかへる。この日もやがてキールがザザと浅瀬へ食ひこんだ。われわれはそのまま跳びこんで泳いだ。安岡君は海が苦手らしく、一人キャビンから首を出してシャッターを切つてゐる。

宮島の海はここ二三年濁つて泳ぐ気がしなくなつたが、この日は案外きれいだつた。潮の

加減か公害自粛のせゐか？　私は好物のこの海の牡蠣の命が延びたことを喜んだ。

午後は島の外側へ廻つたが、この辺はいつも大抵風があるので、舟はデッキのビール瓶を振り落して快走する。

夜は岩国へ案内し、錦川の鮎で地酒を飲んだ。

翌日はザッと市内見物。この町の風光は、名物の錦帯橋が背景に鬱葱たる城山の原生林を控へてゐるので引立つてゐるのである。その麓に紅葉谷といふ小公園があり、今は廃園みたいになつてゐるが、その苔むした石の一つに「一勺」といふ字が刻まれてゐる。そこは明末の亡命帰化僧独立がこの地に滞在してゐてその水でお茶をたてたといふのだが、次のやうな詩が遺つてゐる。

一勺源頭水作レ池
流通有レ頼何全支
当三軒檻(欄干)一出(ヅル)分明意(悟リノ)
寒暑涓々不レ息時

（私の漢文はあやしいから、あてにしないで貰ひたい。大体禅臭の強い文章だが、詩文としてよりも私はそこに亡命者の哀愁が漂つてゐると思ふのだが如何なものか？　この廃園の寂寥たるたたずまひがまたそれをよく伝へてゐるのである。）

独立俗名戴笠、字曼公。杭州の人。幼にして頴悟、詩と書をよくしたが、官界を喜ばず、二十五歳で官を辞したといふ。後、明の義軍に投じて清軍と戦つたが敗れ、明の滅亡とともに長水の語溪に隠れ、詩文を弄ぶ傍ら医を業として世に出なかつた。

長崎に渡つて来たのは承応二年五十八歳であつた。あちらの歴史では「南海に渡り杳として行方を知らず」といふやうなことが書いてあつて終つてゐるさうだ。その翌年隠元が長崎へ亡命してゐるが、独立はこの地で彼に導かれて僧籍に入り、初めて独立と号した。彼の黄檗山とのつながりはそこに始まるのである。墓も黄檗にある。

彼が初めて岩国へ来たのは寛文四年（一六六四年）六十九歳の時であつた。その縁は長崎で格式の高い皓台寺によつてゐる。当時この寺の住職月舟は岩国藩士朝枝喜兵衛の兄で、喜

兵衛は当時長崎にあつてオランダの外科医学を修めてゐたが、当時世子であつた吉川三代目の藩主広嘉（ひろよし）が病弱であつたので、医名の高い独立が岩国へ呼び寄せられるやうになつたらしいのである。

独立は通事の独健といふ僧を伴ひ、皓台寺月舟や出迎役の佐々木といふ藩士等と岩国へ着き、宿舎に古刹永興寺があてがはれた。例の一勺の水は本堂のすぐ上の崖下にある。当主広正・世子広嘉ともすぐ対面、脈をとつてゐる。それから吉川家の記録には診察や歓待の記事が夥しく出て来る。何かの興味までに一つだけ例を挙げて見よう。一行は寛文四年四月十三日初めて岩国へ着き、同五月四日の日記である。

独立・独健・皓台寺参上、奏者両人七間中門わき迄出逢ひ案内仕り候、御対面所上之間へ三人衆請入、追つけ殿様御出逢ひ成され、御脈御見せ成され候、額字二ツ独立持参仕られ候、内一ツは河御座舟の額字の由に候、御菓子二色御茶たばこ出し、御床に唐大名衆の筆の由にて御置き成され候、さて殿様御入り成され、三人衆罷り戻るべき由候処に、ゆるゆる罷り居られ候へと道久にて仰せ達せられ、碁を打ち申され候、それ以後出来合の御料

理出で申し候、御相伴松岡半右衛門・玄貞、以上五膳、御膳部二汁五菜、濃茶出で、又引菓子二色出し、殿様御出座成られ緩々と成られ御親談、三僧退去。

とある。まづ六万石の殿様としては精一杯の歓待なのであらう。

やがて同月九日、独立等三僧を主賓として錦川で舟遊びが催された。その時の独立の詩を一つ、これも詩としてよりも私の文章の説明として引用する。

一艦随レ流十里湾
層巒畳嶂護二重関一
分明赤壁千秋賦
棲鶻巣危不レ可レ攀

この場所は錦川の錦帯橋より遙か下流、岸壁に一面松が茂つた深淵で、小赤壁と呼ばれ、これも独立の命名だと伝へられる。彼はその後もしばしばそこに舟を浮べ、蘇東坡にあやか

つたといふ。しかし赤壁は独立には忘れられぬ土地で、それはその渓谷美よりも、彼の実弟がやはり明末の義軍に加はり、この地で戦死してゐるのである。然しこの詩はただの風景描写として読んでもいいであらう。私の父と伯父も、別に独立にあやかつてではなく、この淵に舟を浮べて酒を飲んでゐたのを覚えてゐるが、さういつた景勝の地である。大げさにいへば京都の桂川のやうに松が密生した絶壁だが、今は対面の河原が開けて、そんな風情はない。

更に十日もたつた同十九日に三人の僧は厳島に遊んだ。広嘉の接待である。「船本まで串柿三把進ぜられ候」とある。これがわれわれのあなご飯代りか、或ひは船頭のおやつか。二泊して二十一日に帰岩してゐる。海からの印象はまづ私たちのヨットと大差ないといへよう。左に、

放舟横海訪二神山一
水闊呑天一望間
片席随潮風到レ岸
翠薇濃処指二仙関一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com